

# 国道210号赤岩地区の災害復旧時における 広報活動について

西村 温<sup>1</sup>・杉谷 一郎<sup>2</sup>

<sup>1</sup>九州地方整備局 大分河川国道事務所 経理課 (〒870-0820 大分市西大道1-1-71)

<sup>2</sup>九州地方整備局 大分河川国道事務所 調査第二課 (〒870-0820 大分市西大道1-1-71)

令和2年7月豪雨で被災した国道210号赤岩地区において、被災直後から応急復旧完了までのSNS等を活用した広報の取り組みや、その成果、またその後の大分河川国道事務所としての広報活動における新たな取り組みを発表するものである。

キーワード SNSを活用した広報, 国道210号, 令和2年7月豪雨, 赤岩地区, こうほう課, 災害復旧

## 1. はじめに

2020年7月6日から8日未明にかけ、梅雨前線の活発な活動により線状降水帯が形成された(図-1)。大分県玖珠郡九重町国道210号近傍の野上雨量観測所では降り始めから52時間の累加降水量が600mmとなるなど記録的な大雨を観測し、平年値を大幅に上回る降雨を記録した。この地区の1ヶ月の平均降水量が約370mmであるため、1ヶ月雨量の約1.6倍の量の雨がわずか2日間で降ったこととなる(図-2)。

今回被災した国道210号は福岡県久留米市から大分県大分市までを結ぶ約150kmの幹線道路であり、そのうち県境の日田市から由布市までの約90kmの間で大小合わせ約50箇所以上の災害が発生した。中でももっとも被害の大きかった箇所が大分県日田市天瀬町赤岩地区(以下、赤岩地区)であり、道路延長約100mに渡って大きく崩壊した(写真-1)。崩壊箇所は、玖珠川の水衝部にあたり、水の勢いが弱くなってからの復旧作業となるため、結果的に約一ヶ月以上、全面通行止めが続いた。地元からは生活に欠かせない幹線道路であるため被災状況や復旧状況などの問合せが日々寄せられることとなった。

このような状況下においては、迂回路情報や復旧状況などは非常に重要な情報であり、情報提供を行うことは必要不可欠である。そこで、積極的な広報活動を行うため、現在主流となっているSNS等の広報媒体を活用することで幅広い利用者に情報提供を行うこととした。本稿では、国道210号赤岩地区の災害復旧時における広報活動の内容や、広報を行うために行った工夫点、広報活動の成果、事務所としての新たな広報力向上に向けた取り組みについて報告するものである。

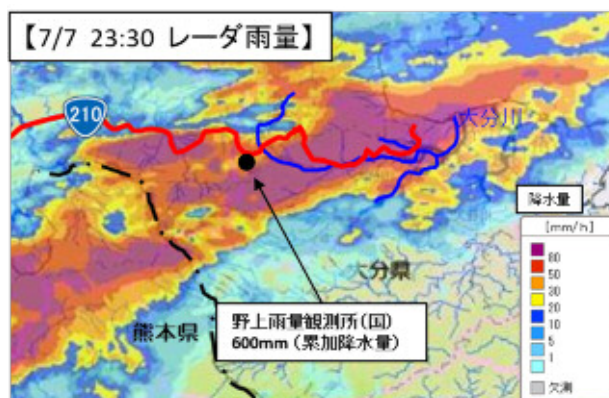


図-1 レーダ雨量 線状降水帯

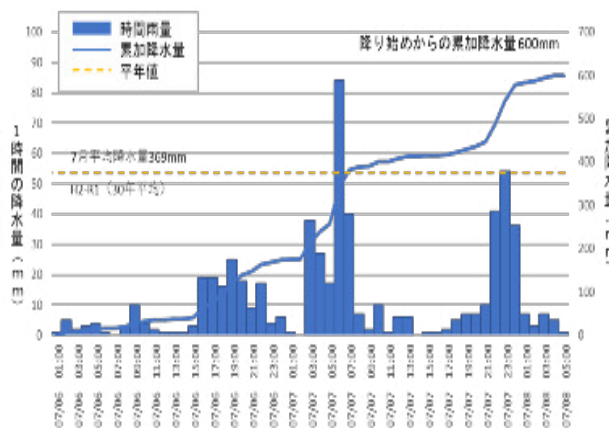


図-2 2020年7月6-8日 野上雨量観測所降水量



写真-1 大分県日田市天瀬町赤岩地区被災箇所

## 2. 具体的な広報活動

### (1) 報道機関へのブリーフィング

今回の被災規模は非常に大きく社会的な影響も甚大であることから、速やかに有識者の方々に専門的な知見を求めることを目的に対策検討委員会（国道210号災害復旧対策検討委員会）を設立した。そして、その委員会の場を活用し、NHK、西日本新聞、読売新聞、大分合同新聞社、大分建設新聞社、TOSテレビ大分の6社の報道機関にドローンで撮影した被災箇所の動画等を活用して、被災状況等を説明した。報道機関を通じ速やかに地域住民の方々へ情報提供を行った(写真-2)。



写真-2 報道機関へのブリーフィング状況

### (2) Twitterによるリアルタイム情報の発信

災害発生直後から定期的な情報発信を行っており、特に7月21日から赤岩地区の応急復旧が完了し片側交互通行となる8月17日までの間、毎日、Twitterで復旧状況の写真等を更新した(写真-3)。

### (3) 大分河川国道事務所HPに特設コーナーの開設

赤岩地区の復旧状況について、事務所ホームページに特設コーナーを開設した。ページ内には、被災に関する情報、記者発表資料、国道210号周辺の通れる箇所を知らせる「通れるマップ」、Twitterで日々更新した復旧写真、定点カメラ撮影による復旧状況写真をつなげたタイムラプスなどを掲載した。

### (4) 九州地方整備局HOTNEWSへの投稿

赤岩地区に関するHOTNEWSを「ふっきゅう赤岩」としてシリーズ化し、現在はシリーズ15まで定期的に投稿を行っている。全てのアクセス数をカウントすると約23,000アクセスを記録している(写真-4)。



写真-3 Twitterで伝える復旧状況



## (5) 災害冊子の作成

国道210号の被災から応急復旧完了に至るまでの記録として、1冊の冊子(全22ページ)を作成した(写真-5)。

冊子の主な項目は下記のとおりである。

### (a) 豪雨の状況

降り始めから災害発生までの雨量状況についてレーダ図等を掲載し、線状降水帯や令和2年7月豪雨について簡単にまとめている。

### (b) 被災の状況

豪雨を受けてどのような災害が発生したかについて、写真や地図等を用いて説明している。

### (c) TEC-DOCTOR・防災エキスパートによる支援状況

今後の復旧方針などの助言を受けるためにTEC-DOCTOR・防災エキスパートにご協力頂き、被災現場の状況確認や、復旧に向けた対応方針について検討している状況を載せている。

### (d) 防災室での職員の姿

防災室で日々行われていた打合せや九州地方整備局道路部との情報共有会議の風景などを載せている。普段一般の方は見ることがない防災室での職員の活動状況が見られるページとなっている。

### (e) 復旧作業及びその経過

赤岩地区の被災箇所は珍珠川の水衝部にあたるため、復旧においては水の勢いを抑制することから始める必要があった。そのために、まず河川内への進入路を設置し、瀬替え(写真-6)を行い、瀬替え後には施工ヤードの造成、路体基礎となる袋詰め玉石の敷設、路体盛土、路床盛土及び舗装といった復旧過程をわかりやすく順を追って説明している。

### (f) 現場技術者の作業状況

7月の猛暑の中、24時間体制で復旧に向けて取り組む現場技術者の作業状況など、普段目にすることはあってもなかなか広報資料として残らないところを焦点にして掲載をしている。

### (g) 応急復旧完了

被災から41日後の2020年8月17日に応急復旧が完了し、当日の朝7時に片側交互通行で開放した。黄色いパトローカーを先頭に、待ちに待ったこの日を走る一般車両や規制解除の報道など嬉しいニュースのページとなっている(写真-7)。

### (h) 広報のとりくみ

本稿で説明している広報以外にも内閣府防災担当大臣を始めとする視察状況なども掲載している。さらに規制解除後には地元首長から感謝のお言葉を頂き、大分河川国道事務所長と無事に復旧できた喜びの握手をしている写真なども掲載している。

### (i) 事務所職員の活動状況

現場において、時には現場技術者に指示を行い、時には夜間作業の監督、また交通誘導に走るなど、職員の活動状況をまとめている。



写真-4 HOTNEWS「ふつきゅう赤岩」シリーズ



写真-5 R2年7月豪雨 R210復旧までの軌跡



写真-6 河川内進入路の設置及び瀬替え状況

### 3. 広報活動における工夫点

#### (1)オリジナルロゴマークの作成

災害に関する情報発信が多い中、各資料にロゴマークを入れて情報発信を実施することで受け手が即座に赤岩地区関連の資料であると認識ができるように配慮した。ちなみにロゴマークは職員自らが色々な案を考え、所内アンケートによって決定したものである(図-3)。

#### (2)復旧工事の進捗の見える化

復旧工事の進捗がよりわかりやすくなるように同じアングルで現場の写真撮影を行い、Twitter等で毎日更新した。写真は、起点側、終点側及びドローンによる全景空撮の写真を1セットとし災害現場の状況、日々の復旧の様子が分かるように工夫した(写真-8)。

また、Twitter投稿時は「#災害復旧現場の見える化」というハッシュタグをつけることで検索のしやすさ、シリーズ化を追求した。

#### (3)定点カメラによるタイムラプスの作成

被災直後から現場の状況が確認できる定点カメラを設置し、復旧状況を1時間おきにキャプチャー映像として記録した。

復旧完了後には、1時間おきに記録した定点カメラ映像をつなげ、約1ヶ月の復旧過程をタイムラプスとして制作した。タイムラプスはTwitter、事務所ホームページで公開したところ大きな反響を得た(写真-9)。

#### (4)広報を意識した写真撮影

災害が起こった場合に写真を撮ることは非常に多いが、撮影した写真は現場の被災状況写真がほとんどである。近年は国土交通省のTEC-FORCEの制服の背中文字がわかるように写す傾向もあるが、現場で施工している技術者や、建設機械、現場や所内打合せ状況の写真など人を意識した写真は少ない。そこで現場技術者や職員の活動状況の姿など、その点を考慮した写真撮影を実施した(写真-10, 11)。

#### (5)所内における部局横断的な広報チームの結成

非常体制時においては防災業務計画書に沿ってそれぞれの課における役割分担があるが、災害対応時に常に広報だけを意識して動くことは非常に難しい。そのため各々の班とは別に広報特別チームを結成し、各班との連携を図りつつ、広報を意識した目線で動ける人員を配置した。人員は事務官、技官、期間業務職員の分け隔てなく、道路・河川の枠をも越えた人員で結成した。また、情報収集・共有が迅速に行えるように防災室に常駐し通常業務を行いつつ広報活動に取り組んだ。



写真-7 応急復旧完了に伴う規制解除



図-3 ふっきゅう赤岩オリジナルロゴマーク

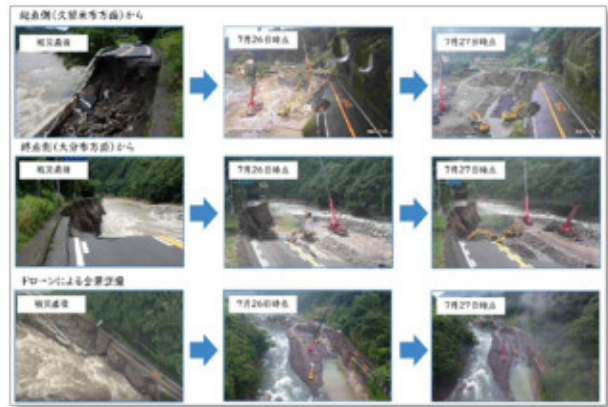


写真-8 日々更新を行った復旧状況写真



写真-9 国道210号 赤岩地区 復旧までの軌跡



#### 4. 広報活動の成果

広報活動の成果として目に見えて増えたものはTwitterのフォロワー数である。2017年12月の開設から被災直前の2020年6月までのフォロワー数(892名)と比較すると2020年7月の1ヶ月間で約2倍(1,747名)に増加した。増加はその後も続け、令和3年6月時点では約3倍(2,656名)近くまでに増加している(図-4)。増加要因としては、被災直後からの被災状況等を積極的にツイートし続けた結果、情報がタイムリーに伝わったことや復旧状況を毎日更新したことにより現場状況がよく伝わったためと思われる。被災後にもっとも反響のあったツイートは、土砂流出や冠水、全面通行止めに関するもので120,000インプレッションを記録した。この記録は大分河川国道事務所がTwitterを始めてから最も回数の多かったツイートの3倍を超える閲覧で、災害が発生した場合にいかにも情報が求められているかがよくわかる。広報活動を充実させたことで被災による全面通行止めを40日間にわたって実施したにもかかわらずクレームは非常に少ないものであった。

また、復旧後のツイートでも驚異的な記録を作ったツイートがある。それは被災直後から復旧完了までの映像をつなげたタイムラプスである。このタイムラプスは「#705枚の軌跡」とのハッシュタグをつけ、約6,700回の再生を記録した。動画再生で2,000回を超えることすらあまりなかった状況であったが、3倍以上も再生されることとなった。

このようにTwitterのフォロワー数の増加、インプレッション数、ツイート等の記録を更新する中で九州外からも嬉しい声が聞こえた。大分県から遠く離れた山梨県のFM Fujiのラジオ番組で「大分の国道210号の復旧工事が凄い」と紹介されたのである。その中で特に注目されたのはツイートに添えた写真であった。コメントターからは「写真が非常に格好いい。道路の写し方が格好いいと道を利用する人も働いている方々もテンションが上がるかなと思います。」とのコメントを頂いた。

このラジオ番組以外でも赤岩地区のツイートに対して「リアルタイムで見ることができるので、ありがたい。」等の応援コメントも多く頂いている。ラジオ番組や応援コメントからもわかるように広報においては情報のタイムリーさ、また情報だけでなく情報と一緒に提供する写真・動画が非常に大事であることが窺える。さらにこのようなコメントを頂くことで職員のモチベーションアップにも繋がった。

外部ばかりでなく整備局内でもある記録を達成した。HOTNEWSのGood数及びアクセス数において九州No.1からNo3を「ふっきゅう赤岩」シリーズで独占し、九州地方整備局の多くの職員に読んで貰うことができた。

以上のことからTwitterのフォロワー数の増加など大きな広報基盤を獲得することもでき、当事務所として今回の広報活動において確かな手応えを感じた。



写真-10 現場で作業する技術者

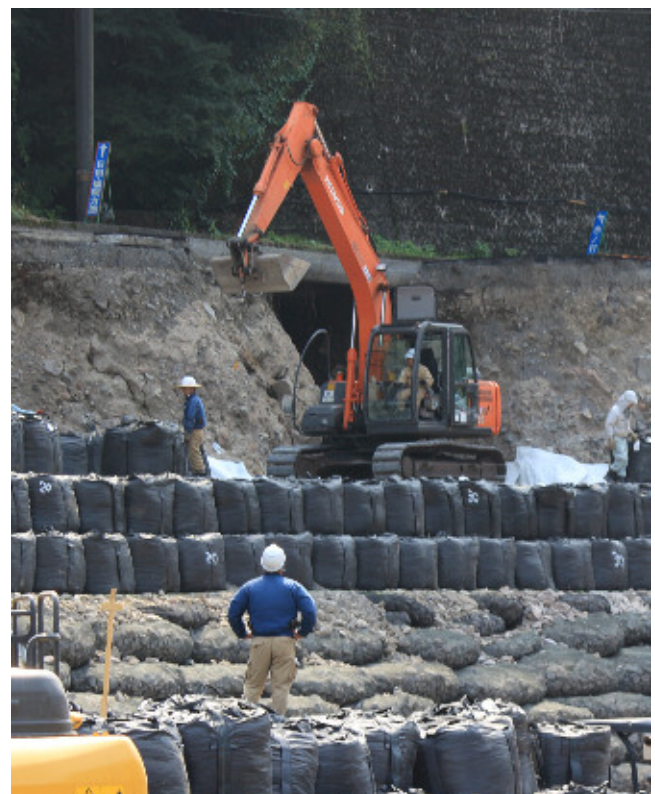


写真-11 現場で作業する技術者

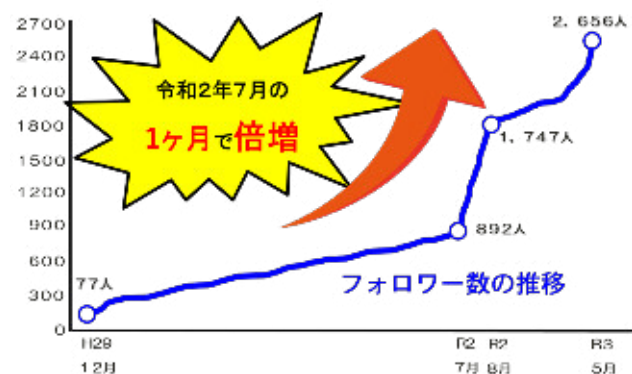


図-4 フォロワー数の推移

## 5. 更なる広報力の向上へ

広報活動の成果からもわかるように、工夫をこらした広報活動の有効性は非常に大きく、今回築いた広報基盤の継続及び更なる拡大が非常に大事である。このことから更なる広報力の向上を目指して新組織の立ち上げを行った。「九州地方整備局 広報実施要領」に基づき指名された「広報官」による広報チーム「こうほう課」である(写真-12)。「広報官」は大分河川国道事務所内において実施した所内HOTNEWSコンテストの受賞者及び希望者から指名された。2020年度「こうほう課」発足当時は事務官3名、技官7名、期間業務職員2名の計12名の広報官で始まった。2021年度では人事異動もあり新たに募集等を行い、事務官5名、技官9名、期間業務職員1名の計15名となっている。具体的な活動としては所内各課・出張所における広報活動の補助、現場・イベント等の取材・広報活動資料の作成及びHOTNEWSの作成などである。特に混合事務所ならではの取り組みとして河川系職員が道路の現場取材を実施し、逆に道路系職員が河川の現場取材するなど部局横断的な活動も行い、分野が違うことで生まれる発想や気づきなどいろいろな視点を大事にした活動を行っている。こうほう課内においても写真撮影が得意な職員からは他のこうほう課メンバーに写真の撮り方を講習するなど、各々得意分野を活かした役割分担で作業を行っている。また、現在は一方的な情報提供だけでなく参加型のツイートも検討しており、よりフォロワーに興味を持ってもらうことを目的にクイズ形式のツイートを行うことを企画中的である(図-5)。こうほう課としてどのような広報をおこなっていくかまだまだ検討段階ではあるが、各課を横断的に跨ぐチームだからこそ1つの視点に捕らわれない幅広い活動に努めていきたい。

## 6. おわりに

今回の赤岩地区の災害で取り組んだ広報活動であるが、災害時においては特にタイムリーな情報をもとめられるということがよくわかった。今後の広報においても災害時には積極的にタイムリーな情報提供に努める必要がある。しかし、災害時だけでなく日頃からも一般住民が求めている情報などの把握に努めることで広報活動がより意味を成し、重要となってくる。行政の自己満足な広報にならないように気をつけなければならない。未だに根強い公務員は「お堅い」というイメージを脱却するような広報を行っていき、親しみを持ってもらうことで提供する情報の価値がより一層上がってくる。せつかく出来た「広報基盤」及び「こうほう課」を活かし、大分河川国道事務所は更なる躍進を遂げたい。



写真-12 こうほう課発足



図-5 Twitterクイズ形式企画案

謝辞：本稿をまとめるにあたり、ご助言、ご指導いただきました関係者の方々に深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。